

四分間の夏

笠岡市立笠岡小学校

四年生 田中心琴

四分間ってどんな感じだろう。四分のタイマーをかけてやってみた。漢字の宿題。ああ、つかれた。まだ二分しかたつてない。なわとび。ああ、足がつりそう。今度はテレビゲーム。わくわくしながら遊ぶと、すぐにタイマーが鳴った。えっ、まだそんなに遊んでないよ。タイマー、まちがってないか？

私は琴をひくのが好きだ。琴の音が大好きでおちつくからだ。琴の先生にコンクールに出てみようと言われた。私は人前が大学の苦手だからいやだったけど、負けずぎらいのスイッチが入った。四分間のコンクールにちょう戦すると決めたときは、まだ秋だった。うまくひけなくてふてる私に、

「自分で決めたんだから何度もやりなさい。」

と、母が注意する。琴をひけない母に何が分かる。はらが立つてまたひいた。

「そんななげやりな音ならやめなさい。」

と、言われて、くやしくてなみだが出た。

もう春。ここまであつという間だった。ひけるようになったけど、何かがちがう。私の音じゃない。

そんなとき、耳が遠いおじいちゃんの前でひいた。全く動かないで、体で音を感じようとしてくれていた。そうだ、コンクールに勝つことで頭がいっぱいになっていたけど、私の強みは心にひびく音を出せることなんだ。

いよいよ出番。大ホールでの初ぶ台。どんなにごまかしてもかくせないきんちょう。すぐくこわかった。母が私の耳元で、「おじいちゃんに聞いてもらったときのようにひけば大丈夫。」

とささやいた。

ぶ台の中央に一人で向かい、気づいたときは、ぶ台そでで待つ母のおねにとびこんでいた。私、ちゃんとひけたんだとわかって、スキップしたい気分だった。おねをはって歩いた。

会場で聞いてくれていたおばちゃんが、

「みこちゃんがかかなでる最初の音を聞いて、すうっとなみだ
夏が終わった。

が流れたんよ。感動させてくれてありがとう。」

と、声をかけてくれた。この言葉が、この後私を温かく包んで
はげましてくれるとは思ってもいなかった。

コンクールのけっかが、はりだされた。私の名前の横は真っ
白だった。負けた。よろこぶ子がとなりについて、その場にいる
のがつらかった。私は、とにかくしゃべり続けた。

「暑いね。」

「のどがかわいたね。」

何か話してないとなみだがこぼれそうだった。母と二人です
わってジュースを飲んだ。私の負けずぎらいは母にいた。母は、
くやしくて言葉にならなかった。

そのとき、さっきのおばちゃんの言葉を思い出した。

「感動させてくれてありがとう。」

私がひいた琴の音におばちゃんは感動してくれたんだ。心に
ひびく音を出せていたんだ。勝たなくていいといえばうそにな
るけど、私は、ふたたびむねをはった。そのすがたを見て母が
笑顔になった。

心のきん線にふれる…。私の名前のゆらいを感じた四分間の